

語りから検討する40・50代の「親との関係」のとらえ方・意味づけ

坂上 ちおり¹⁾, 園田 直子²⁾, 津田 彰²⁾

要 約

本研究は、「40・50代の人々は親との関係をどのようにとらえているのか」について、語りから現象を抽出し検討を行うものである。具体的には、40・50代の10名（男性4名、女性6名）に自由度の高い半構造化面接を行ない、その語りの逐語録から「親との関係についてのとらえ方」について類型化し、それぞれの特徴を整理した。その結果、【親との関係性を強くとらえている語り】と【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】の2つのカテゴリーを見出した。【親との関係性を強くとらえている語り】については、[逆転の関係性]、[少しずつ変わっていく関係性]、[変わらない関係性]の3つの概念を抽出した。一方、【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】については、[意識しない関係性]と、[意味づけを放棄した関係性]の2つの概念を見出した。そして、この5つの類型（概念）について「世話をする」という枠組みから考察を行なったところ、それぞれの類型によって「世話をする」ことの重みやその内容など、その意味づけが異なることが明らかになった。

キーワード：語り、意味づけ、親との関係、40・50代、質的研究

問題と目的

本研究は、40・50代の人々が「親との関係をどのようにとらえているのか」について、語りから現象を抽出し検討を行うものである。

中年期に関する研究

これまで心理学においては、いわゆる中年期とは「自己のあり方が根底から問い直される転換期である（岡本，2002）」と指摘されてきた。中年期の自己や自己同一性の視点から岡本（1985）は、中年期の心理的变化の特徴を5つ見出している。それは、身体感覚の変化、時間的展望の狭まりと逆転、生産性における限界感の認識、老いと死への不安、といった否定的な変化と自己確立感・安定感の増大の肯定的変化である。

また、中年期の自己同一性の再構成は、「関係性」を基盤として行われるという（杉村，1999）。子どもとの関係については、岡堂（1978）がこの時期を「子

どもの巣立ち期」と指摘するように、あるいは「空の巣症候群」といわれるように、子どもとの関係性を取り上げる研究は進んできている（北村・無藤，2000；難波，2000；矢吹，2000；清水，2004）。ここでは、母親が子どもの巣立ちを主観的に認識する事で、アイデンティティは発達に向かうと言われている。

また中年期にとっては、子育てがひと段落し、夫婦という関係性についても焦点が当たる時期であると言われる（岡本，2002）。夫婦関係についても、平山・柏木（2004）が夫婦間コミュニケーション・パターンと結婚観との関連を明らかにしているように実証的に取り上げられるようになってきている。

しかしながら、40・50代の関係性として親が取り上げられることは少ない。数少ない検討のなかでは、親の介護を通じたケア役割（岡本，2002）や、両親に対する生殖性（ニューマン&ニューマン，1988）といった「世話をする」ということを通して、自己やアイデ

1) 久留米大学大学院心理学研究科
2) 久留米大学文学部

ンティティを見出していくという視点での取り上げられ方である。

本研究の問題意識である「親との関係をどのようにとらえているのか」といった視点に近い研究としては親の死の受容や成長の側面を焦点化する研究は見出せる（遠藤，2002. 小澤，2005.）。しかし，これらの研究は「親との関係」に焦点を当てたものではなく，「親の死」という一時点のライフイベントをどのようにとらえるのか，受け入れるのかという視点での研究である。

日本における中年期に関する研究を概観すると，「親との関係をどのようにとらえているのか」について生涯発達の視点での研究はみられないといえよう。

生涯発達の視点

本研究では，ある特定の時点やライフイベントに対する意味づけを検討するのではなく，むしろ人生全体に渡って「親との関係」についてどのようにとらえているのか，意味づけているのか，との側面からの検討を行いたいと考えている。

生涯発達の視点での意味づけを取り上げる意義について，田垣（2002）は「ある現象に対する意味づけや価値評価の時間的あるいは社会空間的変化のプロセス」を重視すべきである，と述べている。また，やまだ（2000）は「心理学は，短いスパンでの自己の行動の説明や内観は研究してきたが，人生という長い時間軸のなかで人が自分自身の経験をどのように組織するのか，どのように意味づけるかという問題を無視してきたといえよう。」と指摘している。

本研究では，時間的経過のある出来事やライフイベントの事前・事後で取り上げるのではなく，時間的経過のなかで，その人が親との関係をどのようにとらえてきたのか，どのように意味づけてきたのかについて検討することを目指している。それは，一人一人の人が日々の具体的な生活や人生のなかで，どのような意味づけを行なっているのか，その心理的側面について検討する必要があると考えるからである（柏木，2001. 徳田，2004）。本研究は，「その人の生きている文脈ごと抽出すること（箕浦，1999）」を重視する立場に立っており，人生全体を通して「親との関係をどのようにとらえているのか」に関心を持っている。

社会的状況からみても，少子高齢化が進む現在，40・50代の人が親との関係をどのようにとらえているのか，親との関係をどのように意味づけているのか，生涯発達の視点から検討することは重要な視点を提供することになるであろう。

語りについて

本研究は，40・50代の人が「親との関係をどのようにとらえているのか」について検討するにあたり，「語り」を取り上げる。それは，とりえ方や意味づけを検討するには「語り」が適していると考えるからである。

中年期が，自己や関係性の再構成の時期であると考えれば，それは語りが生まれやすい時期であるとも言える。Brunner（1997）によると，それまでの自己概念が他者との関わりで機能しなくなったとき，語りや意味が生成されるという。

また，方法論的な側面からも，語りを研究として取り上げる意義は十分にある。やまだ（2000）は，人生を物語として研究する意義について7つの理由を挙げており，そのうちの一つに現象の一般化の問題を取り上げて議論している。それによると，「物語モードでは，『個別の具体性』『日常の細部の本質的顕現』自体を複雑なまま，まるごと一般化しようとし，それをモデルとして代表（represent）さえる方向性を持つ。」ことと，「具体的な意味を持つので，同一化（identification）と模倣（ミメシス）を促し，人の生き方のモデルになりやすい」ことが述べられている。

本研究においても語りを取り上げるのは，語り手の持っている意味そのものを検討するからであり，その検討によって何らかの共通性を見出すことで，そのままの形での一般化を目指しているからである。

本研究の目的

以上のように，中年期は自己あるいは関係をめぐって再構成を行う時期であるとの前提に立つと，この再構成という現象を取り上げるにあたっては語りから検討することが最も適切であろう。また，生涯発達の視点を持ちながら，「日常的なものの意味づけ」といった現象を文脈ごと切り取るには，素材として語りを取り上げ，その分析には質的な方法を用いることが適切であると考えられる。

本研究は40・50代の人が「親との関係をどのようにとらえているのか」について，語りから質的に分析し，そのとりえ方の類型を見出すことを目指す。そして，それぞれの類型について「意味づけ」の視点から考察を深めることを目的とする。考察にあたっては，抽出された様々な現象のうちの一つである「世話をする」との枠組みを用いて，意味づけについて検討することとする。

方 法

協力者 協力者は調査者の直接的な知人あるいはその夫である。事前に調査の趣旨を記した説明書・承諾書を直接あるいは郵送にて渡し協力を依頼し、同意を得られた男性4名、女性6名、平均年齢は49.7歳（41から56歳）である（表1）。リクルートは理論的サンプリングによって行なわれ、分析の過程に添ってその属性に合った協力者に依頼をした（詳細は後述）。

面接 調査期間は2005年1月から2005年9月にかけて、協力者の自宅や職場、調査者の自宅にて面接を行なった。面接における質問は、はじめに協力者や協力者の親の現在の年齢や居住状況についての基礎的な情報を聞き取り、その後「これまで生きてきた中で、親御さんとの関係を強く意識すること、意識した時期などありますか」、「これまで生きてきた中で、親御さんとの関係は変わってきたなあと思われませんか、それとも変わらないなあ感じておられますか」という、大きな問いかけを全ての協力者に共通して投げかけ、できるだけ語り手が語りやすい順番で、語りやすい内容について重点的に語り展開するように配慮をした。

その後、語りの展開が見られない協力者については、児童期、青年期、就職した頃、結婚した頃、それ以降、現在というように発達段階にそって、それぞれの段階での「親との関係はどのようなものでしたか。その関係をどのように感じていましたか」などの問いかけをした。また、面接の後半には調査者が事前に設定した質問項目について、半構造化された形式で面接を進めた。最後に、語り手自身が話し足りないことや、事前に話したいと考えていたことなどについて語るよう促し面接の終了とした。

面接はICレコーダーに録音し、面接を行なった調査者自身がフィールドノート^(注1)を記し、逐語録化を行なった。面接により録音された部分は、32分45秒から55分46秒である。

理論的サンプリング 協力者の選択にあたっては、分析の経過に添って理論的にサンプリングした。理論的サンプリングとはGlaser & Strauss (1967: 邦訳1996)によると、理論産出を目的として行うデータ収集プロセスとし「このプロセスを通じて分析者はデータの収集とコード化とを同時に行い、どのデータを次に収集すべきか」を決めていく過程であるとされる。

表1 調査協力者

ID	F21	F22	F23	M21	M26	M27	F24	F28	F25	M29
理論的サンプリング	ベース	ベース	ベース	男性ベース	男性ベース	男性ベース	介護成人子	介護子なし	介護成人子	男性ベース子なし
年齢	41	48	51	40	48	48	55	55	56	55
面接日	2005.1.7	2005.1.27	2005.2.9	2005.2.26	2005.3.7	2005.3.20	2005.3.22	2005.3.24	2005.9.16	2005.9.17
録音時間	38分36秒	37分35秒	48分26秒	55分10秒	54分46秒	46分00秒	32分45秒	44分08秒	54分35秒	36分41秒
調査者との関係	心理学専攻大学院生	心理学専攻大学院生	調査者の勤務先の知人	F21のパートナー初対面	調査者の勤務先の知人	調査者の父の従姉妹の夫	調査者の母の高校時代からの友人	調査者の母の高校時代の友人	調査者の母の高校時代の友人	調査者の母の幼馴染の夫
親の居住状況	他県、母親が三女とふたり暮らし	同県、父母二人暮らし	車で10分の距離に父母二人暮らし	他県、父親施設入所、母親一人暮らし	同県、父母二人暮らし、長男夫婦と同敷地内	両親共に、特養施設入所	母:老健施設入所	両親共に死亡生存時、二人暮らし	母は長男夫婦と同居	長男夫婦と同敷地内にて同居
介護認定			父3母要支援		一種	介護4				
親の年齢	母 63	父母 78	父 79 母 75	父母 77歳	父 78歳 母 72歳	父 77 母 75	母 87		母 79	
親の病気	父:ガンで死亡 母:ガン 狭心症	父:血液の病気	父:心筋梗塞 母:肝臓ガン	父:痴呆症	父:急性アルコール中毒	24年前に、両親共に脳梗塞	母:糖尿・痴呆症など 父:78歳で脳梗塞で死亡	母:二年前、76歳で入院を繰り返して死亡 父:5年前、81歳で脳梗塞で死亡	父:悪性繊維腫にて10年前死亡 母:血糖値が高く入院	父:痴呆症にて13年前死亡 母:ガンにて昨年死亡
原家族	3人姉妹の長女	二人姉妹の次女	姉ひとり、弟二人	姉4人、妹一人の長男	兄一人姉二人	兄二人、姉一人の末っ子	三人姉妹の末っ子	姉1人	兄、妹、弟 祖父母、曾祖母	兄3人、姉3人の末っ子
親の職業	農業	会社員	農業	漁業	自営業	農業	農協	営林署	農業	農業
本人職業	教員	院生	教員	施設職員	教員	会社員	専業主婦	専業主婦	専業主婦	会社員
子の年齢	長男16 次男11	長男18 次男14	長男24次男22 長女20三男17	長男16 次男11	長男11 長女8	長女19 次女18	長女29 次女27		長男27 長女25	
配偶者	40	49	55	41	41	46	55	57	53	55

注: Fは女性、Mは男性である。同じ数字は夫婦であることを示す。

(注1) フィールドノート

一見すると、本調査に必要な無い情報とも思えるものについてもフィールドノートとして記している。例えば、面接日の天気、面接者に対して協力者が普段語っていたこと、基本属性で調査者が既知の情報、インタビューの前後にどのような関わりを持ったか（多くの場合その後に食事などを行っているため）、などである。また面接までの設定などを仲介者が行った場合には、仲介者がどのように調査者との間の調整に関わってくれたのか、調査者の主観的な印象、インタビューにおいて協力者と調査者の空間的な位置関係などを記述した。

本研究は、外的な条件や属性によって「とらえ方」の類型や「意味づけ」を見出すことではなく、条件や属性を越えた共通性を見出すことを目指している。つまり、語りにみられる「とらえ方」や「意味づけ」の特徴そのものから現象を分析していくということである。具体的に本研究においては、「同じライフイベントを経験した人」という外的条件を設定してサンプリングを行い、「同じライフイベントを経験した人にも関わらず、そのことのとらえ方や意味づけは異なる」ということを示す方向での理論的サンプリングを行なっている。

本研究における理論的サンプリングの過程を便宜的に、3つの段階に分けて記述する。第一段階では、「親との関係をどのようにとらえているのか」との本研究の問題意識について多く語ってくれるであろう人に協力を求めた。具体的には、心理学専攻の大学院生2名、親が入退院を繰り返し看護や実家の生活支援を行なっている女性1名の協力を得た。

第二段階では、2つの外的条件からサンプリングを行なった。ひとつは性別である。第一段階で得た協力者は女性であったので、男性3名の協力を得た。もう一つの外的条件は、親の介護や看護といった生活構造の変化を経験しているかどうかである。そこで、親の介護や看護の経験のある人と、介護中の人の計2名の協力を得た。分析（詳細は後述）の過程では、性別による「親との関係」の語り方に違いがみられないこと、介護をした人全てが「親との関係が変わった」ととらえることはなく、むしろ「介護を経験しても、なお親

との関係は変わらない」という語りも見出せた。つまり、この2つの外的条件は「親との関係についての語り」を規定する条件ではないとみなした。

第三段階での理論的サンプリングとしては「子どもとの関係によって、親との関係をとらえなおすかどうか」という三世代の意識について検討するため、子どもが成人である人、また子どもがいない人を設定して協力を得た。データ収集と分析の過程では、三世代の意識は「親との関係のとらえ方」と関連して語られることが少なかったため、本研究の分析としては検討しないこととした。

分 析

本研究では、既存の理論や既存の分析基準から逐語録の分析を行なうのではなく、協力者の語りの逐語録・フィールドノートそのものから分析の視点や観点を抽出する。

その抽出の流れは、基本的には原田（2003）の説明する流れになる（図1参照）。本研究では、結果を得た分析過程を3つの段階に分けて記述する。

まず第一段階では、女性3名の逐語録から暫定的にいくつかの概念を抽出した。原田（2003）の流れ図では、〈①概念のラベル付け〉にあたる分析作業である。具体的には、それぞれの逐語録から「親との関係について発話された部分」について抜き出し、A5サイズ用の紙に印字し、K・J法の要領で共通する要素を概念としてまとめた。この段階で得られた概念には「親との関係性変化の無意識」・「子どもを持つことによ

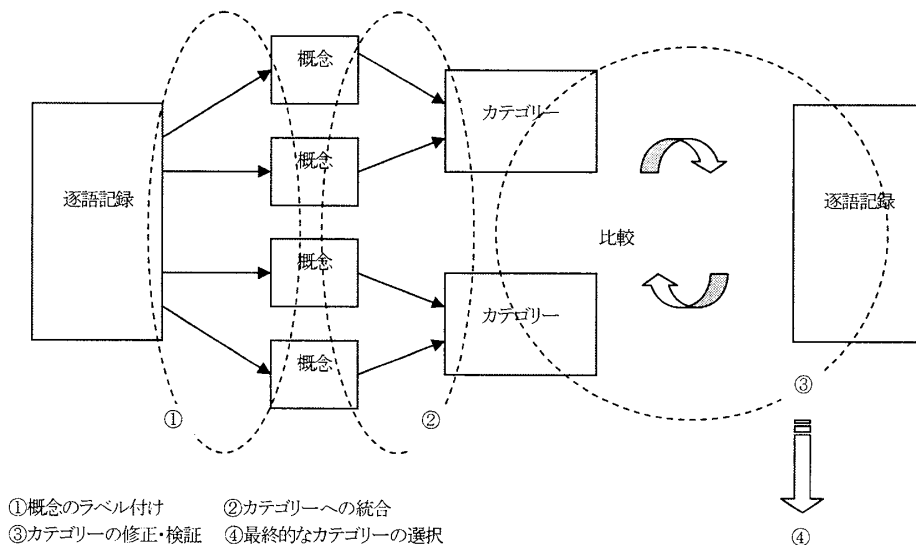


図1 分析手続きの流れ（原田，2003を一部修正）

て、親に対する気持ちの変化・ありがたい]・[親をひとりの人としてみるようになった]・[親子関係の逆転]・[発達段階によって常に変化している]・[親との関係性にとらわれている・心理的葛藤中]・[親との関係性変化の意識は父と母とで異なる]・[親子関係変化のとりえ方の契機は親の病気と子どもの誕生]など、様々な内容の概念が暫定的に抽出された。

第二段階では第一段階で得られた概念に沿って面接の後半部分に新たに質問を設定した男性協力者3名と、介護を経験した協力者2名を追加して分析を行なった。全体としては8名の逐語録の分析となる。ここで、新たに得られた概念はないが、高次のレベルでのまとまりであるカテゴリーの抽出に至った。原田(2003)の流れ図では、〈②カテゴリーへの統合〉にあたる分析作業である。暫定的に抽出されていた様々な概念が全て高次のカテゴリーとしてまとめられているわけではない。カテゴリーに統合するのかどうかの基準は、その概念が「親との関係のとりえ方」という現象の全体像を説明できるものであるか、説明力があるかどうかという点から検討を行った。箕浦(1999)によれば、「事象間の関係の叙述」ができるかどうか、いくつかの概念の相互の関係性が見出せるかどうかということが、カテゴリー化の要件であるとされる。本研究では、第一段階で得られた概念から、2つのカテゴリーに統合された。また、概念の表記に修正を加えた。カテゴリーとして抽出されたのは、【親との関係性を強くとらえている語り】と【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】の2つのカテゴリーである。【親との関係性を強くとらえている語り】のカテゴリーについては、[逆転の関係性]・[少しずつ変わっていく関

係性]・[変わらない関係性]の3つの概念でまとまった。一方、【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】のカテゴリーについては、[意識しない関係性]と、[意味づけを放棄した関係性]の2つの概念でまとまった。

第三段階では、既に抽出されたカテゴリーと概念とが逐語録に沿ったものなのかどうかを、改めて確認するために協力者を2名追加し、全体の協力者を10名に設定して再び検討を行った。原田(2003)の流れ図では、〈③カテゴリーの修正・検証〉・〈④最終的なカテゴリーの選択〉にあたる分析作業である。具体的には、既に抽出したカテゴリーや概念に照らし合わせながら10名全ての逐語録の整理を行った。また、この分析作業に加えて本研究では、再度の分析を行なっている。それは、既に抽出したカテゴリーや概念を想定せずに、第一段階で行った分析と同じ作業を改めて行い、10名全体を通して見落としている現象(概念)がないのかどうかの確かめである。この段階では、概念とカテゴリーの構造に変更はないことが確かめられた。

結 果

分析の結果、本研究の問題意識である「親との関係のとりえ方」について、2つのカテゴリーと5つの概念を抽出した(表2)。

【親との関係性を強くとらえている語り】のカテゴリーについては、3つの概念で構成されている。その一つ目は、「親が年を重ねていって病気をしたら、こんど自分がしてもらった側からする側に変ったのが逆転したところ(F23)」との語りにもみられるような[逆転の関係性]を強くとらえている語りである。

表2 「親との関係のとりえ方」の類型と特徴

【カテゴリー】	【概念】	語りの全体的な特徴	語り方(style)の特徴
【親との関係性を強くとらえている語り】 ・ 語り手が語りの展開を設定する ・ 面接の時間は長い ・ 具体的なエピソード	[逆転の関係性]	・ 親との関係が「変わった」ことを逆転の視点で語る ・ 関係が逆転した契機について明確に語る	・ 逆転を説明するためのエピソードが逐語録の大部分を占める ・ 具体的なエピソードも語られるが、むしろ気持ちについての語りが中心
	[少しずつ変わっていく関係性]	・ 発達段階に添って、その時その時で「変わってきた」関係を語る ・ 関係が「逆転した」契機については、明確に語らない	・ それぞれの発達段階についての語りと、そのことを総括して親との関係全体を説明するその人なりの言い回しが語られる ・ 聞き手が尋ねると、具体的なエピソードが語られる
	[変わらない関係性]	・ 「親はいつも私のことを考えてくれる」関係が、一貫して「変わらない」ことを、強く語る	・ 「変わらない」ことを示すために、人生のいくつかの場面での具体的なエピソードを語る ・ 生き生きとした語り方
【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】 ・ 聞き手が語りの展開を設定する ・ 面接の時間は短い ・ あまり具体的にないエピソード	[意識しない関係性]	・ 親との関係は「あんまり意識していない」「印象がない」「普通」などと語り、この意味で「変わらない」と語る	・ 聞き手が尋ねると、具体的な日常的なエピソードが語られるが、そのことが親との関係についてどのような意味があるのかについては、語られない
	[意味づけを放棄した関係性]	・ 親との関係について「特に意識しない」と語られるが、次いで親に対する気持ちについて矛盾を含んだ形で語る	・ 親についてのネガティブな感情や矛盾した気持ちが語られる場合に限り、「・・・けど」のままの語尾で締めくくられる

ふたつ目は、発達段階に沿って「少しずつ変わっていく関係性」をとらえている語りである。そして3つ目には「(父親は)常に前に行っていた。(病気の上では)私が気持ち逆(上)なのかもしれませんが。でも、私が父に対する気持ちっていうのは、ずーっともう変わらなかったですねえ。(F25)」との語りにもみられるような「変わらない関係性」を強くとらえている語りである。一方、【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】のカテゴリーについては、「親ってというのは、そんなに変わってないっていうのがあるけど(F24)」との語りにもみられるような「意識しない関係性」と、親との関係について全体的に尋ねると肯定的評価であるのに、具体的な出来事については否定的な気持ちが語られ、その差について特に語られることのない「意味づけを放棄した関係性」の2つの概念である。

2つのカテゴリーについては特徴を示し、5つの概念については、実際の語りを引用して詳細な内容と語りの全体的な特徴を示す。なお、人数については協力者1人について「父親との関係」、「母親との関係」の2つの関係が語られていることから、倍の20名と表記している。

(逐語録の引用については、下線は著者が加筆した。また、括弧内は聞き手である著者の質問および発言、括弧内の斜体文字は著者が付記した。)

【親との関係性を強くとらえている語り】

- ・面接時の特徴としては、調査者である聞き手が面接の次の展開を設定することが少なく、聞き逃した点を確認していくという意味で聞き手が発言することが多い。面接の時間も比較的長くなる傾向にあり、聞き手が打ち切る場面もあった。
- ・語り方の特徴は、エピソードが生き生きしており、その時感じていた気持ち、そのエピソードについてのとりえ方や意味づけなども合わせて語られる。ポジティブな出来事だけでなく、ネガティブな出来事についてもこの語り方は共通している。

【逆転の関係性】 3名

親との関係が「変わった」ことを逆転の視点で語る。親との関係が逆転した契機について明確に語り、また逆転後の関係については葛藤めいて語る。そこで引用されるのは「理解はしている」という語りである。

F25 (母との関係) 56歳女性 入退院を繰り返す母親の看護経験あり 母親は長男夫婦と同居

なんとなく父が亡くなってから、母との関係が、少一ずつ、こうしてきて、来てるように、感じて、感じてます。

(母が兄嫁と暮らし始めたここ2・3年は)母もなんか、弱くなって、弱い、私達から見たらあつて、弱くなったなあって思うんですけど、娘によりかかれたい気持ちがあるところが。こんど、娘の側から気持ちが分かるころがあつて。また、母とぐっと近くなってきましたね。

心配することの方が、だんだんだんだん強くなって。

母が、こうなんか、今までしっかりしてたのが、気持ちが細く、ほそくなって、もうこう耐えてるっていうのが感じられるようになって。また、母と近くなってきたかなあつて思ってます。

もちろん、ああ、あの自分が母親になって、母親もこんなに私達のことを心配してくれたんだなあとかはあるんですけど。やっぱりこう、あの、父がちょっと前にいたんだつたら、母は、やっぱり、まあまあ同じライン。同じラインかな。若い頃は、前にずっといた人ですから、わたしよりもずっと前に。でも、あれですけど、あのここ3年ぐらいは特にもう、なんか、こう支えてあげたいって言う気持ちが、なってるって言う感じですねえ。その辺りが、自分の気持ちの方が母よりもこう、前に行ってるって感じですかねえ。

【少しずつ変わっていく関係性】 2名

「関係が変わってきた」ということを、発達段階にそって語る。今現在の親との関係は「逆転した」と語るが、明確な契機については述べられない。また、親との関係全体を説明するその人なりの言い回しが語られる

F21 (母との関係) 41歳女性 ずーっと普通に話してた

思春期まで：〈口うるさい・居てくれて安心〉母が居なくて、たまらなく寂しい気持ちを感じたエピソード

結婚して：〈対等な関係〉子育ての愚痴を共有

最近：〈逆転した関係〉体調管理について、口う

るさく母に言う母親とはね、ずーっとふつうに話してたけど。やっぱり共通の話題として、やっぱり女としてっていうか、やっぱり女性としてっていうか、母性の話っていうのがふつうに話しができるっていうのが。お互い、母親も私のことを、やっぱり一人前みたいにみなしたのかなっていうのが、あるけど。まあ、そこらへんで全然、今まで、どっちかっていうと。まあもちろん子ども産んでからも頼ってたけれど、やっぱり、そうじゃなくって、どちらかっていうと、対等みたいな、話し方になったのが、子ども産んだ頃ですね。たぶん

(じゃあ劇的に変わった感じがしますか、それとも)

劇的じゃないですね。

(自然な感じのほうが強いですか)

うーん、どっちかっていうと

(こう対等な関係で、おんな同士というか、対等に話しができるなあっていう、印象的に覚えている場面とか、)

えー、父親ほど無いかもしれない。うーん。印象的に覚えてる場面、あんまりないかなあ。ほんとに、よーく普通に、よくしゃべってる関係だから。

(小さい頃から、)

うん、小さい頃から、しゃべってる。いつだって、自分にバツの悪いこと以外はしゃべってたから。ああ、でも怒られることがなくなりましたよね。

(えっと今のF21さんとお母さんとの間柄を形容詞で言うとうどうですか)

たぶん、立場が逆になってて。母親は私がいると、こう安心なんです。私は心配なんです。

(どんなことが心配ですか。)

もう、やっぱり病弱じゃないですか。母親もガンで。一年前に手術してるんで。それと狭心症の発作とかもあるから。やっぱり、うん、とにかく私が口うるさいんですよね。

(お母さん、生活では、病気以外では支障ない) 支障ないですよ。ただ、狭心症とがあるから、ひとり、どっか行ったりしないね、とか。そういうこととか。こないだも発作が起きたみたいって電話で掛けてきて、だから、「ちょっと、冬場なんだから、外に出歩くなとはいわんけど、ちゃんと温度差管理して、自分のからだのこととか分かつとるやろ」とかって。私が叱ってるんですよね。ほんとに、いつの頃からか、私のほうが。

(こう逆転して。いつのころからか、っていうのは感覚的には)

いつだろう、あんまり、はっきりはわかんない。

[変わらない関係性] 4名

「私のことを考えてくれる」、「その存在感とか、優しさ」が一貫して変わらないことを語る。そのことを説明するためのエピソードは、人生のどの場面についても取り上げられる。

F25 (父との関係) 56歳女性 10年前死亡した父親の看護経験あり

(どんな、風に気持ちの面で変わってきたっていうふう感じてらっしゃいます。)

そうですねえ。気持ちの面で変わってきたのは、まあ、それまでは元気で、父が病院にかかることもなかったものだから、全て私より前にいたんです。

(いつも、前にいて、引っ張ってくださる感じですか。)

そうそうそう。引っ張って。ああ、言葉でああしろ、こうしろっていうことは、ほとんどない父だったんだけど、小さい時から。もう、でも、その存在感とか、優しさとか、どういうのかなあ。子どものために一生懸命してるっていうか。そういうことは、常に感じて、育ってきたっていうか。

(間柄が、こんな感じだったというようなこと。)

ああ。まあ、私としては、若い頃はとにかく前にいて、頼りになる。もう、なんでも、何かあったら父が、まあ受けてくれ。何かあったら、父に相談すればいい。っていう感じですねえ。でも、結婚してからも、その優しさっていうのは、ずーとこんどは、私のことも心配してくれましたし。今度は孫達、可愛がってくれたものですから。

(略)

(前にいて、こう引っ張ってくださるとか、何かあったときに助けてくれるっていう感覚っていうのは、ずーと結婚されてからも。)

ずーとありましたね。ずーと亡くなるまで。亡くなるまで、ずーとありましたね。

(お父様にご病気だと分かってからも、)

ずーと。あの父は病気だけれども、何かあったらこんなこんなだけれど、どうしようって言ったら、

それは、こんなこんなしたら良いとか、誰に相談するとか。それは、ホンと亡くなるまでありましたねえ。

(実際に、病気になられてから、ご相談されたりとかありましたか)

ああ、子どもが、長男が学校途中で変わったこともあったもんですから、そんなこととか。もう、その時は病気だったんですけど、こんなこんなだっという事を言ったら。あ、それはやっぱし、じゃあ、もう本人にとっては。もう、そういうことは、もう全部、こう、聞いて。じっと聞いて、ああって。そういう、だから、こうしたら良くてその通りじゃないんですけど。まあ、自分の意見は言ってくれてましたねえ。

(他の人にお話しを伺うと、親御さんが病気になって、子どもが親の世話をするってなると、立場が逆転するような感覚になるっておっしゃる方もおられますけども。そのあたりはいかがですか。)

病気に対しての立場っていうのは、私、その父。例えば、父がだるいとか何とかっていうのを、こちらが聞いてあげて、ああそれはこうよ、ああよ、とか話しをしてあげるから、まあ。その、関係の上では、私が気持ちが逆なのかもしれませんけど。でも、私が父に対する気持ちっていうのは、ずーっともう変わらなかったですねえ。

(いつも前にいてくださる)

そういう感じでしたねえ。まあ、これで病気しなければ、もっとあれだったんでしょうけれど。

(中略) そういう流れのなかでの看病を看るって言う意味では、全く逆だったんですけど。

(気持ちの上では。)

上ではやっぱし、もういつも私より、なんか私の前にいたような気がしますよねえ。

【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】

- ・面接時の特徴としては、調査者である聞き手が聞き取りを行いながら、次の展開を設定しながら進めていくことが多い。聞き手の質問の意図からは、外れた発言が多く、再度同じ質問を行なうこともあった。面接の時間も早く終了している。
- ・語り方の特徴は、聞き手の質問について答えるまでに時間がかかることがあげられる。また、その語りの内容や出来事は具体的ではない。あるいは、具体的なエピソードが語られた場合には、その意味につ

いては語られない。あるいは、意味が語られた場合にも、自身がとらえている意味というよりも、身近な人がとらえている意味・言説を引用して語ることが多い。

【意識しない関係性】 7名

「親との関係」について、「あんまり意識してない」「印象がない」「普通」などと語り、語りの展開があまりない。そこで、具体的なエピソードを尋ねると語られるが、その一つ一つのエピソードがどのような意味があるのかについては語られない。「関係というところのような感じですか?」と具体的なエピソードのあとに尋ねると「別に」や、「あまりない」などと語られる。

F24 (両親との関係) 55歳女性 父親・母親とも同居しており自宅での介護経験あり 現在、母親は施設入所中

(F24さんの気持ちのなかで、どんな感じで気持ちの変化があったのかなあっていう感じなんですけど。)

うーん、気持ちの変化ねえ。うーん、なんていうかなあ。その、気持ちの変化っていうのは、施設に入ってから、私がやさしい気持ちになった変化は、そのあるんだけど。その親と子の、その変化?

(親の子の間で、こう気持ちが、こう変わってきたかっていう)

その親に対する気持ちは、ずーっともう、本質的には、私は変わってないと思うんだけど。

(どんなところが、変わってないって言う感じが) 親は親って言うのは、私はそんなに変わってないっていうのがあるけど。うーん、なんていうかな、自分ではあんまり気がついてないんだけど

(お父さんとの間で、こう変わったなあって、関係が変わったなあって言うのはありますか。)

ない、父との関係はない。あんまり。父親はあくまでも、父親一って。父親って感じね。うん、そんな感じやね。ちょっと色々あってね、こう、なんていうか。憎むまではいかないけど、ちょっとね、あったけど。色々ちょっとしたこと。もうしょうがないか、思うてね。もう、諦めた感じだけ。父とは、そんなね。もう私たちには甘かったっちゃけど、まあ、母には厳しいね、うん。まあ、昔ながらの一家の長っていうかんじやな。そんなに逆

らえないっていうかね。そんな感じかな。やさしいけど、逆らえないとか。そんな感じやな。

(その後の、お父さんとの関係っていうとどんな感じ)

別に、そんなにだから、あんまりないもんね。父とはね。仲が悪いわけでもないけど、べったりでもないっていうか。うちの子たち、お父さんっ子でね。お父さんとよくしゃべったりするけどね。

私はね、そんな。

(倒れられた、こう間(あいだ)が変わったとか)それも、別にね。うーん、あんまりどうってことないね。

かもしれませんが、してやってる。まあしてる方でもないんですけど。してやってるばかりで、してもらうことがないなあっちゃう、寂しい思いをすることは、ありますね。そういう。親が元気やったら、ずっとしてもらって、今でも、まあ、してもらっちゃうことはないけど。多少、実家に行ったらしてくれちよつたんだろなあっていうこと。ありますね、そういう残念だなあっていう気持ち。逆に、逆転っ言えば、逆転ですね。逆に、こっちがしてやるばかりで、親からしてもらうことができないし、っていうのが出てくるからですね。

【意味づけを放棄した関係性】 4名

「親との関係」について尋ねると、「意識したことがない」とか、現在の生活の状況などが語られる。次いで、親に対する気持ちが矛盾を含んだ形で語られる。その語りは、語尾が「・・・けど。」で終了され、そのことについての意味づけのない語り。

M27 (両親との関係) 48歳男性 24年前に両親ともに脳梗塞で施設入所

(M27さんと親御さんとの関係が変わってきたなあと思うようなこと。)

親のほうはどうこう、そういう意識っちゃうか。あの、変わったって言うのを感じるっちゃうのはなくて。

(親が病気をして、関係が逆転してきたっていう話しをされる方もおられるんですけど、そういう感覚っていうのは、ありますか。)

関係の逆転っていうか。うーん、そうですねえ。逆転っていえば、逆転でしょうね。親の、まあ、子どもがいくつ、ある程度大きくなっても、親は親で、親から在る程度、面倒見てもらおう自分が、自分で生計を立てても、親から援助から、若干ですね、親から面倒見てもらおうとかですね、援助とか、親が許してくれるはずなんですけど。まあ、親だからですね。それが、親が、逆にしてやることできないじゃないですか。親は、もう、心の中で思って、思ってるけどできない、っちゃうのがある。そこら辺が、親としてつらいところでしょうけど。倒れたらですよ。そこが、逆にこちらがしてやる方、だから、ある面では、まあ、親不幸

考 察

本研究では、40・50代の人々が「親との関係をどのようにとらえているのか」について、語りの分析から現象を抽出した。その結果、【親との関係性を強くとらえている語り】と【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】を見出し、それぞれ3つと2つの語りの類型(概念)から構成されていることが分かった。これを受けて、ここでは先行研究で指摘されている「世話をする」という枠組みを用いて、それぞれの類型がどのように親との関係を「意味づけ」しているのか、についての考察を行う。「親との関係についての語り・とらえ方」という現象そのものは、分析の段階で抽出された概念が多岐の領域に渡っていたことから分かるように、様々な内容を含んでいる。そこで「意味づけ」について検討するにあたり、ここでは様々な内容のなかからそのひとつとして「世話をする」との枠組みを取り上げる。

「世話をする」との枠組み

壁田(2000)は、中年期の人を対象に母親との関係についての質問紙調査を行い、「ケア」と「依存」などの因子を見出し、この2つの因子の関係は40代と50代で逆転していくと結論付けている。ここで言われているのは、40代では母親に「依存」しており情緒的な結びつきが強いが、50代になると母親を「ケア」とするという関係になっていくと説明されている。つまり、40代までの親との関係は「子どもが親に頼る(依存)」ものであり、「親が子どもを世話する関係」であるが、それが50代になると「子どもが親を世話する＝親が子どもを頼る」関係というように逆転していくことが示されているのである。しかしながら、本研究で示唆されたのは、全ての人が「関係が逆転して

いく」ととらえているのではなく、それぞれの類型によって、その意味づけは異なるのではないかということである。そこで、各類型に見られる意味付けの違いを検討するため「世話をする」との枠組みを用いて、考察を行なう。

各類型についての考察 ここでは、本研究で明らかにした5類型で「世話をする」ということをどのようにとらえているのか、どのように意味づけているのか、について検討する。つまり、「世話」という側面から40・50代の親との関係のとりえ方について考察を行う。その上で、「人はなぜ語るのか、なぜ意味づけるのか」について、最終的な考察を加えたいと考える。

【親との関係性を強くとらえている語り】

[逆転の関係性]

親との関係について、強い意味づけを最も必要とする語りであると考えられる。実際の生活で親をどのように世話をしているかという語りよりも、むしろ語り手がどのように親との関係をとらえているのか、意味づけているのかといった視点での語りを中心である。自分が親を気にかける立場に変わったという意味合いでの「親子関係の逆転」を強くとらえている語りである。

F23 (母)「頼られてる」、「向こうが頼ってる」、「親がしてくれて言ったら断れない」、「自分が(親を)気にかけてかなきゃいけない」、
M26 (父)「決定的に立場が逆転した」、「子ども扱えるようになったってうか」、
F25 (母)「母も弱くなって」、「元気だろうかっていう心配」、「心配する事の方が、だんだんだんだん強くなって」、「支えてあげたいっていう気持ち」、「自分の気持ちの方が母よりも、前に行ってる」

[少しずつ変わっていく関係性]

親との関係について、実際のやりとりレベルでのエピソードが語られる。また、そのことを総括した言い回しで関係のことも語られる。

F21 (母)「立場が逆になってて。母親は私がいると、こう安心なんです。私は心配なんです。」、「(体調管理について)、私が(母を)叱ってるんですよね」、「いろんな相談を受けて」

[変わらない関係性]

親との関係について、「変わらない」ということに強く意味づけている語りであると考えられる。「親が自分のことを気にかけてくれている」ことが、小さいころから現在(あるいは亡くなる)まで継続していることを、強くとらえた語りである。

F23 (父)「自分のことを心配してくれてるって思いますね。なんか、無条件に」、「ずーっとそれは思ってたことなんですけどね。結婚する前もね。ほんとになんか、私のことを考えてくれる。それは、なんか、ずーっと感じてきましたね。今も。」
F28 (父)「空気がたいに当たり前って感じ」、「私にはやさしかったですよねえ」、「父の存在は大きい」
F25 (父)「常に前に行っていた」、「その存在感とか、優しさとか」、「そういうことは常に感じて育ってきたってうか」

【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】

[意識しない関係性]

親との関係について、意味づけを必要としていないと考えられる語りである。日常生活での世話の様子は語られるが、そのことが自身と親との関係に対して、どのような意味があるのかについては語られない。

F24 (父母) 日常生活における世話の大変さ(痴呆症の母の自宅介護)は語られるが、関係について尋ねると「そんなに変わってない」と語られる。
M21 (父母) 父の着替えの介助をして「落ち込んだ」と語るが、関係については「親は、っていうのは、子どもはっていうのはあるけど、あんまり意識してない」
M26 (母) 母の不満を聞いて「ガス抜き」の役割であると語るが、「普通、普通なんです。意識してないです」
M29 (父母) 実際のやりとりの中での変化(言葉遣いが変わってきた)は語られるが、関係については「話すという機会がなかった」と語られる。

[意味づけを放棄した関係性]

親との関係について、意味づけをしようとしながら、まとまった意味づけがされていない語りと考えられる。

以下に引用した通り、「・・・だ。だけど・・・ではない。」というような矛盾を含んだ語りがされる。

F22 (父母)「頼られてるような。ま、それ程は頼られてないんですけど」との語り。そのことについての気持ちを尋ねると「あれーっとは思いますが、意外な感じですね」と語る。

M27 (父母)「親から面倒みてもらうとか、援助とか、許してくれるはずなんですけど」、「してやってる。まあしてる方でもないんですけど」との語り。

「意味づける」ということと「自明の語り」

親との関係についての語りの分析から5類型を見出し、それぞれの類型について「世話をする」という既存の枠組みから、意味づけについて考察を試みた。ここで言えるのは、先行研究で言われている「世話をする」ということや、40代、50代の時期にかけての逆転ということが、一義的に全ての人に同じ重みでとらえられているわけではない、ということである。つまり、親を「世話をする」というライフイベントを経験する事によって逆転を強くとらえる人と、にもかかわらず関係は変わらないことを強くとらえる人、あるいは「世話をする」ということでの意味づけそのものに重みを置かない人など、いくつかのとらえ方が現象として存在していることが本研究から示唆された。

それでは、語りという視点から「強く意味づける」とか、逆に「意味づけに重きを置かない」ということは、どのようなことと考えられるだろうか。Bruner (1990)によると、現実世界での逸脱や裂け目があるときに、それをつなぐことで人は受け入れることが出来るという。この「つなぐ」ということが、意味づけや物語ることの動機であるといえよう。一方、物語があるべきようにいる時やすでに自明のことと考えられている事象に対しては、明確な意味づけが行なわれないと Bruner (1990) は述べている。

つまり、逸脱や裂け目があることで「強く意味づける」ことが必要となり、語ることを求めるのであるし、そのような逸脱や裂け目がないとき、あるいは自明のものとしてとらえられているために逸脱や裂け目であることとらえていないときには、語ることを求めないということと考えられる。

本研究において「親との関係のとらえ方」を検討してきたところ、そこに逸脱や裂け目を見出す語り

(〔逆転の関係性])と、そうでない語り(〔意識しない関係性])とを見出せたことが分かる。

この自明の語りについては、実証的にも示されており(徳田, 2004; 坂上, 2004)、年代や属性に関わらず一定の頻度で現れることから興味深い。あえて語る必要のない語りが一定の適応的な機能を持っているとも考えられる。この自明の語りについて検討を深める事も、語り研究において重要な示唆を担っているといえよう。

語りの類型化について

本研究は、既存の理論から現象をとらえるのではなく、現象そのものもつ枠組みによって現象をとらえる立場にある。本研究では、語りそのものから抽出した枠組み(つまり、カテゴリーや概念)を用いて語りを類型化し、それぞれの語りの特徴を示した。

一方で、本研究とは異なる立場で語りを類型化し、実証的に知見を積み重ねているものに、Adult Attachment Interview (成人愛着面接: 以下 AAI と略す)を用いた一連の研究が挙げられる。これは、愛着理論と乳児のアタッチメント測定尺度として用いられる Strange Situation 法で見出された3類型に沿って、質問項目が設定され評定尺度が設定されている。いわば、AAI 研究は理論先行の語り研究である。

AAI で示されている類型とは、自立型・とらわれ型・アタッチメント軽視型の3類型である。それぞれの類型に見られる語り方について述べると、自立型はポジティブな出来事とネガティブな出来事のどちらについても語り、それについて抽象的にまとめた表現をする語り方である。また、とらわれ型はネガティブな出来事を多く語り、それについての気持ちを述べるという語り方である。そして、アタッチメント軽視型は「親との関係は良かった」と言いながら、具体的な出来事についてはそのことと矛盾したネガティブなものを語るという語り方である。

本研究で示した5類型と AAI における類型とを「語り方」の視点からと比較すると、いくつかの共通点がみられる。それは、[少しずつ変わっていく関係性]や[変わらない関係性]にみられる生き生きとした出来事の語り方が自立型の語り方と共通しているし、[逆転の関係性]の語り方の特徴となる気持ちの語り方が大部分を占める点がとらわれ型と共通している。また、[意味づけを放棄した関係性]に見られる「意識しない」と言いながらもネガティブな感情が述べられる語り方はアタッチメント軽視型と共通するものであ

る。

しかしながら、本研究で5類型のうちのひとつとして抽出した「意識しない関係性」については、AAIで示されているどの類型にもあてはまらず、現象そのものからという立場であるからこそ見出せた類型であろう。

今後の課題としては、「語り」現象を理解するにあたって、本研究が目指している現象そのものに基づいた類型と、AAI研究に見られる理論先行による類型とが、どの程度重なり合うのかについて検討が必要であると考える。

今後の分析課題

今後の分析の課題として2つの点が残った。どちらの点についても分析の過程のなかで、概念にちかひものとして見出せているが、そのことが「親のとらえ方・意味づけ方」という現象全体を説明する重要な概念になりうるのかどうか、今後更なる検討が必要である。

ひとつは、父に対するとらえ方と母に対するとらえ方が、それぞれに異なる類型に分類される人と、一致する類型に分類される人がいるということである。父・母のとらえ方の一致はひとりの語りを除いた4名（表記上は父母なので8名分となる）の【親との関係性を殊更にとらえることのない語り】にみられる。【親との関係性を強くとらえている語り】については、[少しずつ変わっていく関係性]の類型でひとりの語り、[変わらない関係性]の類型でひとりの語りが父・母で一致している。しかし、[逆転の関係性]と[変わらない関係性]については、父と母のどちらかの親のとらえ方についての類型であり、一致することがない。このことが、どのような現象であるのかについて、今後の検討が必要であろう。

また、もう一点は分析過程でカテゴリーに統合されなかった概念についての検討が不十分であることである。現象全体を理解するには、説明力が十分ではないとされた概念についても、今後検討が求められる。

以上の二点から、現段階では理論的飽和^(注2)は十分に得られていないことも考えられる。今後、協力者を増やし、現段階で得られているカテゴリーと概念が十分な説明力を持っているのかどうかについて、検討を深めたい。

引用文献

- Brunnr, J.M. 1997 A Narrative model of self-construction. In G. Snodgrass, & R.L. Tompson.(Eds.), The self across the psychology: Self recognition, self-awareness, and self concept (pp.145-159). New York: New York Academy of Science.
- Bruner, J.M. 1990 Acts of meaning. Cambridge, MA: Harvard University Press. 岡本夏木 仲渡一美 吉村啓子 (訳) 1999 意味の復権：フォークサイコロジーに向けて. 京都：ミネルヴァ書房.
- 遠藤みち恵 2002 中年期健常者の親の死の受容と悲嘆のプロセス. 心理臨床学研究, 19, 631-637.
- 原田杏子 2003 人はどのように他者の悩みをきくのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成—. 教育心理学研究, 51, 54-64.
- Glaser, B.G., & Strauss, A.L 1967 The discovery of grounded theory: Strategy for qualitative research. New York: Aldine Publishing Company. 後藤隆・大出春江・水野節夫 (訳) 1996 データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか. 東京：新曜社
- Hesse, E. 1999 The Adult Attachment Interview: Historical and Current Perspectives. In J. Cassidy, & P.R. Shaver (Eds.), Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications. (395-433). New York: Guilford Press.
- 平山順子・柏木恵子 2004 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連. 発達心理学研究, 15, 89-100.
- 壁田季代子 2000 「中年期からみた母親との関係」の発達の变化. 日本発達心理学会第11回大会論文集, 309.
- 柏木恵子 2001 子どもという価値. 東京：岩波書店.
- 北村琴美・無藤 隆 2000 中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連. 日本発達心理学会第11回大会論文集, 363.
- 箕浦康子 1999 フィールドワークの技法と実際：マ

(注2) 理論的飽和

あるカテゴリー・概念に関連あるデータについて、複数あたって検討をしてみても、そのカテゴリーや概念を説明する特徴をそれ以上発展させることができない状態に到達するときに、そのカテゴリーの理論的飽和が起こったとみなされる。

- クロ・エスノグラフィー入門. 京都: ミネルヴァ書房.
- 無藤 隆・やまだようこ・南 博文・麻生 武・サトウツヤ (編) 2004 質的心理学: 創造的に活用するコツ. 東京: 新曜社.
- 難波淳子 2000 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察—語られたライフストーリーの分析から—. 社会心理学研究, 15, 164-177.
- ニューマン, B.M., & ニューマン, F.R. 1988 新版 生涯発達心理学: エリクソンによる人間の一生とその可能性. 福富護 (訳). 東京: 川島書店.
- 岡堂哲雄 1978 家族心理学 東京: 有斐閣.
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子 2002 アイデンティティ生涯発達の射程. 京都: ミネルヴァ書房.
- 小澤義雄 2005 語られる集合的経験としての死別を通じた成長. 日本発達心理学会16回大会論文集, 574.
- 坂上ちおり 2004 人は自分をどのようにとらえているのか—揺れを—指標とした語りの分析の試み—. 白百合女子大学大学院修士論文, 未公刊.
- 清水紀子 2004 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ. 発達心理学研究, 15, 52-64.
- 杉村和美 1999 現代女性の青年期から中年期のアイデンティティ発達. 岡本祐子 (編) 女性の生涯発達とアイデンティティ: 個としての発達・かかわりの中での成熟. 京都: 北大路書房.
- 田垣正晋 2002 生涯発達から見る「軽度」肢体障害者の障害の意味—重度肢体障害者と健常者との狭間のライフストーリーより. 質的心理学研究, 1, 36-54.
- 徳田治子 2004 ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から. 発達心理学研究, 15, 13-26.
- 矢吹真理 2000 中年期女性の自己の捉えなおしと娘との関係の変化 (1). 日本発達心理学会第11回大会論文集, 364.
- やまだようこ 2000 展望: 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か. 教育心理学年報, 39, 146-161.

A narrative analysis of meaning of “relationship of parents” for middle adulthood

CHIORI SAKAUE (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

NAOKO SONODA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

AKIRA TSUDA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study examined how middle adulthood narrate and mean relationship of parents. Narratives about relationship of parents were obtained through in-depth interviews with 4 men and 6 women (age 40-56). Through qualitative analysis using a grounded theory approach, 2 categories and 5 labeling concepts were identified: 2 categories were [intensive meaning about relationship] [nothing worth meaning about relationship]. 3 concepts: [reversed relationship], [transitional relationship], [unchanging relationship] were in relation to [intensive meaning about relationship]. 2 concepts: [unconsciousness of relationship], [cutting off meaning about relationship] were in relation to [nothing worth meaning about relationship]. Then these 5 narrative types were discussed by the view point of care giving. Each type narratives have different meaning about care giving.

Key words: narrative, meaning, relationship of parents, middle adulthood, qualitative analysis

語りから検討する40・50代の「親との関係」のとらえ方・意味づけ